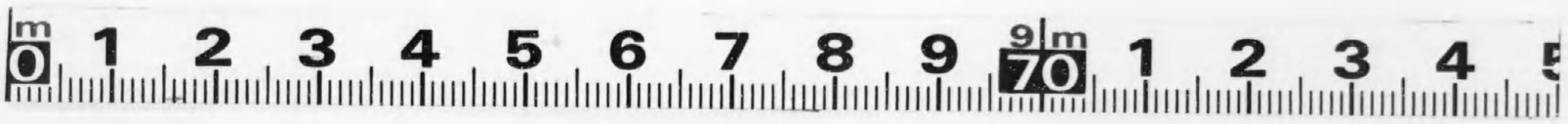
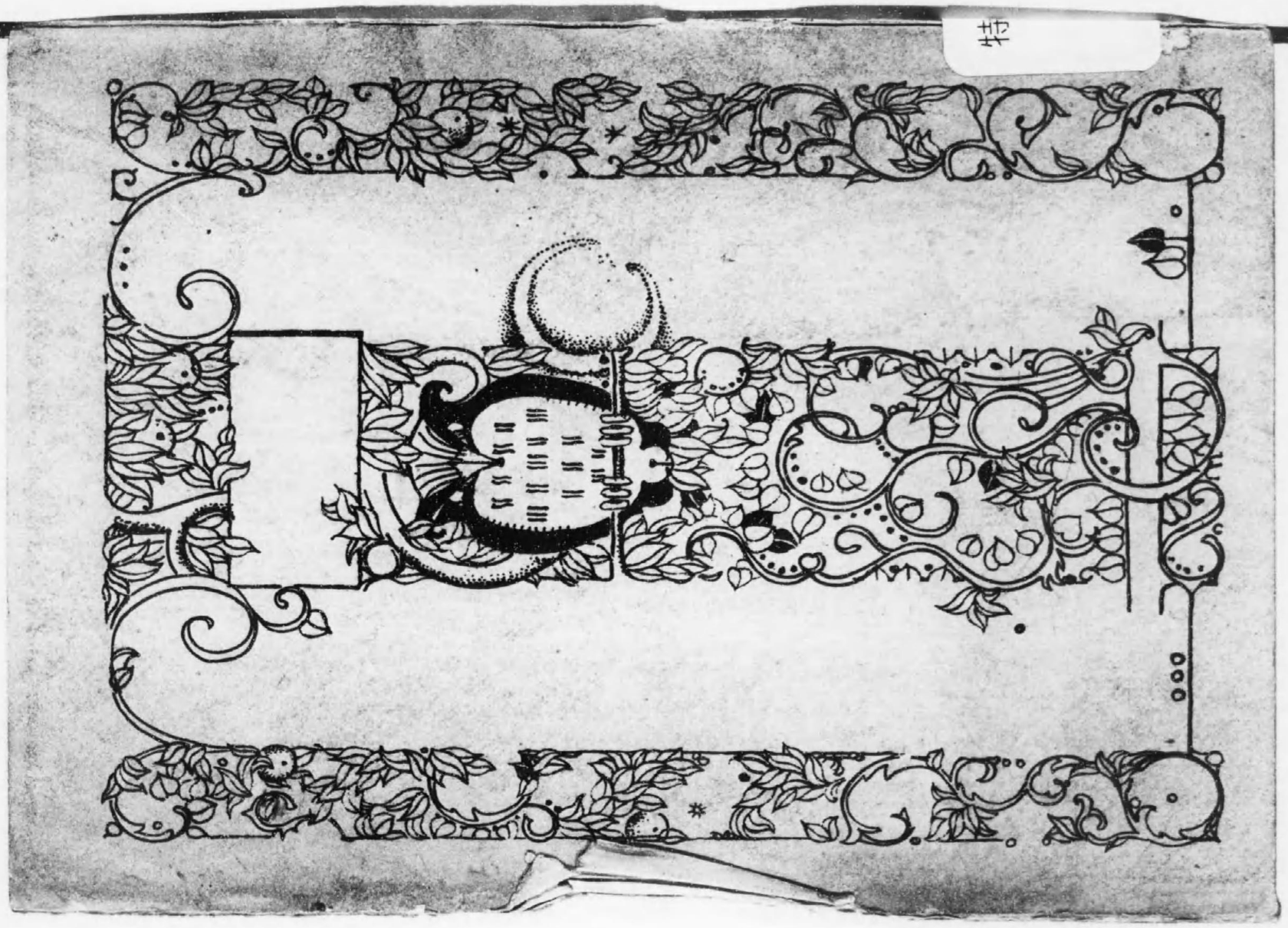

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4



特109
357

詩集

一人の思想より

正富汪洋著

山下靜詩裝幀

大正二十九年五月

14. 9. 29
交内

To

Mr. Upton Sinclair.

Dear Sir,

I have not had the pleasure of seeing you, as a poet of Japan and an admirer of you endeavoring to establish a new social order based upon the social righteousness, and yet I aspire to the honour of dedicating the collection of my latest poems to you.

Yours truly

Ōyo Masatomi.

Sept. 1925.

序

資本家の跋扈する現代では、教育でも、娯樂でも、刊行物でも、團結でも、流行でも、施設でも、殆んど凡てが、資本家擁護的である。そして、それに據つて薫化せられた人々が又、同樣の傾向を有つばかりで無く、いよ〳〵それを增大させるのも極めて自然である。その間に於ける反抗者或は無產者の苦難と結果とは豫想するに難くないのみらず、我々は、まのあたり、其等の人々の言ひ盡せぬ不幸敗亡をまざ〳〵と目睹してゐるのだ。けれども、こんな不幸に陷ると豫測してなほ、この因襲的に强大な力を持つて居る現代社會組織の改造を志し、自ら死地に足を入れるものも絕無とは、斷言し得ないこれは恐らく、その人の正義博愛の念と天禀の性格から生ずるのであらう。

現代の日本詩界の名士といはれる人々の殆んど全部は、朋黨的で

あり、排他的であり、日夜、自己の内充を忘れた外延的表裝的な位置擁護に汲々としてゐる。そしてそれらの人々の手になつた詩史や宣言や編纂物や批評や運動やによつて、多年、養はれた大多數が、それらを根據に、更に批評したり、選集したり、吹聽したりするのも、また極めて自然である。

私は、彼等と全然、別な位置に立つ。過去に於ても一人歩んだ。現在も唯一人歩み續けてゐる。私の生活は、まことに非社交的である。私には所謂流行詩人の傑作らしいものが、どうしても傑作と思はれ無い。華麗の辭、美妙の句、或は不健全な珍奇な表現、歐米新流行に對する熱を伴はない手先の競爭的摸倣、それらを何でも無いとさへ觀る。詩人は、そんなものであつてはならないと信じてゐる。元來、詩人は、社會民衆に對して、喚びかけようとする獨特の精神氣魄を持たないでも可いのであらうか。假令、喚びかける心的何物をも要しない風俗人情自然の描寫だけで可いとしても、今日の諸詩

人のするが如き行き方で可いものであらうか。

「衆寡敵せず」といふ言葉が詩界にも動かすべからざるものなら、私はペンを執らないで可いのだが、一つは性格の上から、一つは古來、『社會改造』といふやうなことのその淵源は極めて少數の思想から湧き出てゐるのだと思ふと、いよ〳〵獨自の思想を守つて、彼等及び彼等の長年月の風化に成長した四周の人々の評論や嘲罵に屈したく無い。

現代は、世界を通じて商業至上主義の世である。人間の爲に商業が存在するので無く、商業のために人間があると言ふべき趨勢である。生産の主要目的が、利潤の獲得である以外に何も無い世である。かゝる時代には、魂の叫びよりも詐僞阿附が歡ばれる。隨つて社會の詩人に待つ所は深い敎訓、又は先導的暗示で無くて大道商人の俗調である。賣笑婦の俗惡なる媚びである。換言すれば、彼等には、思想的詩篇は何等の用も無いのである。

なほ一言加へたいのは、迦毘羅衛城主にならなかつた故を以て釋尊を愛國者で無いと罵るものは、私を愛國者で無いと誹るも可い。ウイルソン大統領が、世界平和を提唱した爲に、愛國者で無いと謗られるならば私も愛國者で無いと擊たれて可い。

私は今年一月、世界改造的思想詩集『世界の民衆に』を英國文豪エイチ・ジー・ウエルズ氏に獻じた。今回、此の詩集をば、社會正義に基く新社會的秩序の創設に努力してゐる米國文界の異彩、アプトン・シンクレア氏に、デディケートしよう。

——一九二五年秋——　著者

目次

思想の種子

思想詩八篇……一
自己ひとりの强さに生きる……二〇
世界を獨歩する者……二三
私は愛す……二六
春　光……三一
人間は元來心たのしく……三三
或夜の夢……三五
火を投げよう……三八

拘　束……四二
私は春の先驅……四三
血の熱する或日(短詠)……四五

樹木と女

詩興の湧いた時……五三
海　水　浴……五五
うねる大濤……五八
連翹の家……六一
みどり葉の海……六三
春の草原にて……六六

光る草波……六八
白木蓮の下にて……六九
白　木　蓮……七〇
大地震の後四日……七三
牛と雨と少年……七四
餘りに海風はげしうて……七八
果　實……八〇
腋　の　下……八三
秋……八四
掌中に握る無限……八六
若　盛　り……八七

春の雪……八九

斷片詩

斷片詩(四十篇)……九三

幼兒の頰

小さい孺……一一七
人類愛……一一九
少女の歎き……一二〇
小兒時代に讀んだ書物……一二三
可愛い擁護……一二四
お馬遊び……一二六
いつまでも此處に……一二八

思想の種子

思想詩八篇

一

あゝ惡世界だ、
眞の幸福を求めない人達で
充滿してる、
何といふ人類の恥辱
どこに、眞の文明がある
たゞ野蠻、たゞ蒙昧。
白皙人種と有色人種との爭ひ

各國、表に人道を稱へ
裏に、互に陷穽を堀る。

日毎、敎ふるは反噬、權謀、
暴虐、殘忍、戰鬪。
あゝ、現今の各國民は
夜さへ眠らず
自らの斷頭臺を築く。

たゞ、自國民の利をのみ計るは
これ自國民を亡ぼすの道だ

いづれの國民も皆
我不幸を招くに先きを爭ふ。

おゝ、あの石油
石油の爭奪戰に因つて
世界はまた大いに亂れむとしてゐる。

各國民皆
猛獸を背負ひ
その嚙附きを恐れつゝ
薄氷を渡つて居る

それが現今の狀態。

どこに新しい聖人がある
生殖をいやしむが如き
僞善者はまだ其處此處に
殘つてゐて、盛んに
害毒を流しはすれど——
どこに新しい敎育者がある
たゞ見る、我々は
新しい覺者は忽ちに
獄裏に死んで行くのを。

あゝ、惡世界、いやしむべき世界、
嗚呼、人類の中に
敎師が無い、敎師が無い。

たま〳〵敎師が現るれば
それを人類の敵とする人類。

愚鈍なる人類、あはれな人類、
見易き道理を
認め得ないまでに
墮落した人類、進步の鈍い人類。

一

世界は沙漠だ
そこに人類愛の森が無い
そこに相互扶助の河が無い
世界は不幸だ
そこに種族の愚かな戰ひ
そこに國と×との野蠻な爭ひ。

世界史に誇るべきは何
人類史の大汚辱は何。

二

因襲無能の宗敎家を葬れ
彼等は唯たゞ儀式の木偶。

今後の宗敎家は
必ずしも寺院と敎會とを要し無いもの。

人類愛に燃えるもの
本能　知性　靈性の調和者。

今、太陽を見た目を山に向けると
廣大な寺院が見える。

あれが燒けても格別
何でも無いとおもはれる。

大きい教化者には
特設説教所は不用。

四

現代の人間は

本能の野獸を
養つて
すつかり
自分を喰はれてしまふ。

本能の野獸は可愛い
本能の野獸を養へ
自分に、じやれる程にならせ
自分を守るほどにしつけよ。

五

二十世紀の
世界を覆ひ
あらゆる生物を
いきづまらせるは
本能の火の　燻り。
知性の水を呼んで來い
靈性の厨夫を招いて來い。

六

新しい世の

平和の使徒ひとり
えごの花散る
芝生にあつて
世界に於ける
同志の芽の
いまだ小さきを嘆く。

國際的正義は
未だ蕾みもしない。
併、こゝに芽生えがある
この一人は尊い芽生え。

使徒は幾年かの後に
世界に咲く大平和の
大きい美しい花を
心にゑがいて
知られずに散つて行つた
過去の同志を
えごの花と眺めた。

七

この不幸は、どこから來る
人類の無智から來る

人類の爭ひから來る
國と×との爭鬪から來る。
この不健康はどこから來る
アルコールから來る
物×專×慾から來る
相互扶助の缺乏から來る。
きこえないか、きこえないか
あの大じかけに
しぼりとられる

血の淙々たる響。

聞こえないか、きこえないか
あの歯車に髪を喰はれ
胸を喰はれる女工の叫び。

八

白皙人類は銀の皿
底のぬけてる銀の皿。

有色人種を愛するの

念(こゝろ)が盛んに燃える時
はじめて、めでたい銀の皿。

世界平和の美しい
林檎の高く盛られるは
愛情の底が成つた後。

世界の正義が眠つてゐる間

世界の正義が眠つて居る間、
資本主義的壓迫は、
常に所謂正義である。
現今、壓迫を恣にする者は、
悉く資本家、
又、資本集中の×家である。

また、所謂正義を鼓舞する者は、
資本家によつて經營せらるる、

諸新聞の記者の多數である。
世界の大出版者である、
及びその變態である所の
賣文の徒輩である。

世界の正義が目覺めない限り、
世界の幸福は、あるべくも無い。

各國の無產者は決して、
他國人を敵視するものでなく、
無產者に至つては互に親み易い、

これは一體何を語るか。

噫、この二十世紀に、
人類愛を説く私は、
二と無い大愚昧である。
はた又、トルストイも、
ブルドーンもウエルズも
時勢を觀得ない　しれもの。

私等の眼よりすれば、
賢とせられる各國の大政治家も、

笑ふべきもの、あはれむべきもの。

おゝ　この江上の月と、風と、
しろがねの波と、跳ねる魚よ。
私は舟を浪に委し、
心を大自然に洗ひませう。

自己ひとりの強さに生きる

一人となり得るものは強い
おゝ一人おゝ一人
自己一人の強さに
生きることのうれしさ。
釋迦も耶蘇も
一人に生きて
そこに毫もさびしさを
感じなかつた。

あらゆる修學の
窮極目的は
ひとりの高い安住に
自分を置くことだ。
世界を一人往くものゝ
壯快を知るは誰々。

世界を獨歩する者

一人を何よりも重からしめよ
われ〳〵が大天地間に立つ時
われ〳〵の身は小さい
然し　その小さい人間の思想は
天地を震撼するに足る。

例へば釋尊の如き
基督の如きニイチエの如き
トルストイの如き

クロポトキンの如き
マルクスの如き
ラツセルの如き
彼等の身長は
十尺前後に過ぎない。

大天地に自己一人
世界の指導者の位置に立ち
假令　解せられずして
かしこに遁れ此處に隱れ
一般より狂犬の如く追はれても

古今獨歩の意氣を棄てぬは
たのもしいではないか。

そこ〻の斷頭臺が
待つてゐるにしても
世界の××××が
思想に逆比例する
大きい强い手を
擴げて待つとしても。

お〻世界を獨歩するものとなれ

古今を一人往來するものとなれ
そして餘りに近頃
萎縮した人類の心に
膨脹のいとぐちを與へよ
あんまりなさけない人心では無いか。

私は愛す

私は愛す
少女の薄い口ひげ。

私は愛す
若い男女の戯れ。

私は愛す
女子の滑かな顎(あご)の近見(ちかみ)
私は愛す

柔かく××××る××。

私は愛す
白木蓮の優雅と香り。

私は愛す
月夜の噴水の碎け。

私は愛す
偏狹な愛×者への反逆。

私は愛す
日本の風土と風俗。

私は愛す
外國のあらゆる男女。

私は愛す
ゲエテのどこまでも人間的なのを。

私は愛す大きい老子の
あの安住。

私は愛すマルクスの
あの××思想

私は愛す
無名の少年また路傍の小草。

私は愛す
醜名を負つた或る人々。

私は愛す
世界一家の大和樂。

私は愛す
私自身の矛盾に似た統一。

春光

吹く風も春めいた
川には氷が流れてゐる
山の色も　かはつて來た
野の　にほひも　變つて來た
花屋を呼ぶ柳屋の
娘(むすめ)の袖もなよびかに
その聲も　やはらかに
おゝ　天地に春は來たのだ。

でも、まだ來ない、世界の人心に
春は　まだやつて來ない
招かねばならぬ　心の春を、
心の春を、春を、
そして世界のいけない墮習を
あの氷のやうに流したい
全人類の幸福のために——

人間は元來心たのしく
乞食は盜賊の側に
心にかゝる何ものも無く
のび〳〵と眠りに入る。
盜賊を防がうための
こゝの高塀が
どんなに盜賊の心を
そゝるかを知らない。

おゝ、人間は元來
もつと　もつと心うれしく
たのしくあるべきが
自然ぢやないか。

大自然の中にすまひ
清い人情の泉を飲んでる
わたしの眠りの
やすけさを見よ。

或夜の夢

あゝ、他人の頭上に遣るものか
「二十世紀最大惡魔」といふ名稱をと
私は、おし寄せて來る群衆の中に
泰然として　屹立した。
ひしめき合ふ人々が
「殺せ」「倒せ」「國賊」
「平和攪亂者」と血走つた眼で睨み
劒を振ひ、拳をかためて迫つた。

「もつともつと、あらゆる人間が
怒ればいゝ、怒る人間がある間
世界改造が必要なのだ」と
心の中ではおもつてゐたが
こんな人々に云ふだけ
無駄だと默つて
額の血を右手で撫でた
指は血でべと〳〵した。

「馬鹿」「痴漢」「狂人」
「夜叉」「惡魔」などの聲が

石とともに飛んだ。

わたしは、それらの人が
あはれで耐らず
だまつたまゝ、しづかに、しづかに
ふりかへりもしないで行つた。

あなたの空には夕雲が
うつくしかつた
海の波はうたつてゐた。

火を投げよう

火を投げよう
火を投げよう
世界のあらゆる
人々の心へ。

怖ろしいとせられても
凄いとせられても
其の實その人々の
利益の火を。

そしてその火で
猛烈に燒かう、
人生を危くする
古い朽ちかゝつた
權威ありとせられて
その實、世に害ある
世界人の心の中の
大建物を、
灰にしよう、灰に——

一朝世界の民が起つて

世界各國に
天を焦す火の手を
上げることは
想つても
壯快ぢやないか
煮えてゐる×と膏とを
見るのも壯快ぢやないか。

火を投げよう
火を投げよう
あらゆる人々の

心を燃え立たすやうな
われ〳〵の心の底から
湧き出る赤い激しい火を。

高まる改造の
若い歌聲の中に——

拘束

たつた十歩を行くのでも
七八歳の少女らは
なかば飛ぶやうに
跳ねるです。

おゝうたひたい總てに唱はせよ
踊りたい總てに踊らせよ
あんまり不自由な
社會ぢや無いか。

私は春の先驅

私は　曾て　白百合の
花瓣の中にかくれてる
幸多い蜂でした。

私は　かつて　寒風に
吹きまくられて　飛び迷ふ
巷の塵でありました。

私の今は樹傳ひに

樂しい時代を　豫言する
春の先驅の鶯だ。

血の熱するある日

——心の高翔を感じた時に書きつけた短詠數首——

此の紙に此のペンで書く
文字どもが
世界の人の魂を
搖らぬものなら、よした方がいゝ。

×

惡世界を、善世界にしようと
一人が、こゝにとるペンに
ちら〳〵と、ちら〳〵と搖らぐ

みどり葉の影。

×

何といはう、全人類の幸福と
いふことを先づ忘れてる
人類界のこの愚鈍を
憤り泣く人さへゐない。

×

各國の要路の人を蹴倒した
昨夜の夢よ
「我々の、新世界來た」と
叫んだ騒ぎよ。

×

あやまつた×國主義が
いつまでも
いつまでもたゝるに
なほ敎へてる

×

人類の幸福を忘れた小人を
偉人とあやまり
各國が×路に据ゑてる
わざはひの世界。

×

ラッセル君
君を見たけれど近よつて
握手しなかつた、しないけれど
した人よりも君を知つてる。

×

無駄で無い、われらがペンは
無駄で無い
大潮流をつくるのだ
世界の上に、けふもあしたも。

×

明るい明るい

明るい木の間だ
それだけでも
愉快であるのに明るい同志だ。

樹木と女

詩興の湧いた時

感興の湧いた詩を紙上に記しに
書齋へ急ぐ　一歩一歩は
うつくしい女性との密會所へ
急ぐ心地。

自ら開くドーアの　ひゞきも
内に彼女を見るであらう戸を
靜に開く時よりうれしい

あゝ、つゝましやかに、しかし安心して
わたしにキッスを投げかけるひま〳〵
小聲に呟く言葉より更に
うれしい言葉が湧き出る湧き出る。
戀のベッド、ともしびに映る
君が袖模様のやう
詩の中の人物や色合ひが、
親しげに動くよ動くよ。

海水浴

海の深みに漕ぎ出たボート
女ばかりの華やかな
水着の色よ肉の色
かゞやく帽の下の眼よ。

海は燦く黄金の色
遠い波戸場のパラソルは
紅の百合白い百合

熱砂にやすむ少女達
可愛い瞳　小さい臑
砂で築いた城郭に
ばさりと入つた黄金の波。

にはかに濱に咲き出たは
十幾人の少女達
海に入る前立ち並び
首を手脚を動かすは
風に　ざわめく花叢か

沖に渚に美しう
輝き動く白い花
みどりの海の白波か
少女の顔か　鷗鳥、

うねる大濤

眞夏、日盛り海の上
我等男兒の黑い腕
こげよ漕げこげ漕ぎ負かせ
女ばかりで漕ぐボート

女ばかりのそのボート
さても、きれいな海水着
さてもきれいなわらひ顏

青い大濤大うねり
ぴかりオールの金びかり
ひらり鷗の風の舞
漕げよ漕ぎ越せ　そのボート

焦げよ、こげ、こげ、この身體
日本男子と云ふからにや
色が白くちや　名に副はぬ
漕げよ　こげ　こげ　ボート漕げ

色は白いが巧みな漕手

たのもしいぞへ　あなた達
つよい子をもつ母となれ
青い帽子の華やかさ

連翹の家

美しい姫君の
櫛の飾りの、こがね蝶
指のリングのこがね蝶
文庫に飛んだこがね蝶
車にやすむこがね蝶
詩集に舞つてるこがね蝶
鴨居に眠るこがね蝶
衣裳に光るこがね蝶
鏡の裏のこがね蝶

寢椅子(ねいす)の脚のこがね蝶(てふ)

みどり葉の海

二つの大きい蝶の
寢床としては
なほ廣過ぎる
美しい牡丹の花

わたしら二人には
廣過ぎる緑(グリーン)のベッド
みわたす限り
大海原のやうな

青葉　若葉

風に搖れ
日に光る樹の葉の表裏は
青海原にきらめく
波頭のしろがね

朴の根もとの苺の實と
君の脣の色とを見くらべようと
しげみに入れば
ステッキが山椒に觸れて

よい香は忽ちひろがる

また風が吹いてくれば
さら　さら　と鳴る
みどり葉の波
自然のベッドの
この明るさ、こゝろよさ。

春の草原にて

暖い外光に浴する快さ、
おまへと、私と、おまへの妹との混浴、
御覽　そこらにも　幾人もが、
明るい湯の感じを、
よろこんでゐる。

お、晴々しい、
水淺黄の空が見えて、
花や樹の　かざりのある、

區劃の無い大浴槽だ。
こゝにゐると、皆の心が洗はれて、
のび〳〵として來た、
はたけた三人の脚の見よさ。

光る草波

おまへの鳶月毛と、
わたしの青馬(あを)とで、
乘り込んだ草の大海。

丘陵は大きくして、
移動しない大うねり濤。

そこ〻に光る花は、
いたやの貝か　眞珠貝。

白木蓮の下にて

白木蓮は貞女の相(すがた)
犯さうといふ氣は起らないが
そのなめらかさうな色
あまいかをりに
引きつけられて、けふも此處に。

白木蓮

白木蓮が　にほふ
白木蓮が　にほふ
月の宵に嗅く
白木蓮の甘いにほひよ

落ちた花びらば
私に白足袋を　はかせる
そしてあなたの方へ歩かせる
私の足は白木蓮の白

櫻の園む部屋に白々と
うつくしく笑ふは
白木蓮の　あなたの顔

あなたの脣に漂ふは
白木蓮の香
あなたと握る手のめぐりに
漂ふも白木蓮の香

大地震の後四日

門前を過ぎゆく
避難者の數多。

妻は今日もまた
少年少女を叫びとめて
茶や菓子を與へてゐる。

與ふるものも涙
受けるものも涙。

十歳ばかりの女の子は
三日何も喰べなかつたと
妻の胸に抱きつく。

『そこにお持ちのバケツの中は
何ですの？』と妻が問へば
『お父様とお母様とのお骨』と答へる。

いぢらしい浴衣(ゆかた)一枚の子よ
一體、どこから、どこへ
行かうとするのだ。

牛と雨と少年

私はそこの春の並木道が好きだ
それ故、たゞそこを通りたさに家を出た。
春の雨が　ばら〳〵と
みどりの丘の斜面に
聽き佳い音を立てる
私のひろげた傘に
氣持ちのいゝ音を立てる。

水がきれいに流れる細流

そこに一匹の大牛が
雨に濡れて草を喰つてる
その牛の脊の濡毛が光る
そして牛の近くに十二三歳の少年が
可愛らしい顏をして
牛の脊に降る雨をみてゐる
何といふ氣に入つた顏だ！

私はそこを通り過ぎて
一時間ばかり經つて
また　そこに歸つてくると

まだ　その少年は
愛らしい　眼を輝かせて
牛の脊に降る雨をみてゐる。

おゝ　その少年は私等の
遠く及ばぬ詩人か
私等の遠く及ばぬ畫家か
私は　その少年に抱きつきたい程
愛着を感じた。
おゝ　誰の愛する兒か
春雨の中に

牛の脊の雨を視る美少年。

餘りに海風激しうて

あまりに海風激しうて
あなたの聲を奮はれる
をしや　わたしに聞こえ無い。
をしや、あなたのその聲は
きこえぬけれど風のため
あなたの胸が見えました。
風にみだれる額髪

風に音たつ袖の搖れ
海にのぞんだ巖(いは)の上。
搖れてなびいて巖を打つ
その白百合と君の足
みわけがつかぬも快い。

果實

あなた、これを見るのが
少しおそすぎたのです。
でもこの　かをりと色あひ、
どんなにうまいことでせう、
私は不用と言ひ得ないのです。
然し　今は喰べちやならないか、
さきに　他のくだものを喰べたのです、
今喰べなければ
喰べる時は永久失はれる。

あゝ　觀れば觀るほど、
實に　飛びつきたいほど
形のよい色のよい果實です。

腋の下

見た、見た、わたしは見た
あなたが兩腕を　あげた時
毛のうつくしい　腋の下を。

多くの人の斷えず訪ふ
社や寺の奥まつた
しるしの像を見たとても
見かへりもせぬ私さへ
心とられた腋の下。

わたしは見た見た　うつくしい
とび色の毛か黒い毛か
知らねど毛並と丶のつて
生えてるその毛の渦巻き。

秋

朝顔の葉色の帶よ
萩の露に濡れた
あなたの足よ。

さと芋の　にほひのする
あなたの　てのひら
木犀の香のする
あなたの黑髪。

おゝ秋は　あなたにも
みちみちた。

掌中に握る無限

私はきいた　道近の
あの小流れに
歌の曲。

私は見出した、近く在る
あなた一人(ひとり)に
永遠を。

若盛り

ばら　ばら　と　春の雨
わづかばかりの　春の雨。

きれいな女の　四人づれ
三越を出た　四人づれ。

傘も開(あ)けずに　しやな　しやな　と
通りかゝつた　日本橋。

水のみどりに　はら　はら　と
女の襟に　はら　はら　と。

春の小雨は　よいものよ
頬吹く風は　よいものよ。

亂さぬほどに　そよ〳〵と
髪吹く風は　よいものよ。

しめらぬほどに　春雨に
ぬれて　みたいの若盛り。

春の雪

濡れないほどの春の雪
はら　はら　はら　と　春の雪。

あなたの首に　その帶に
ちら　ちら　ちら　と　春の雪。

どこの誰とも知らないが
十丁ばかりの二人づれ。

あなたの首の　うつくしさ
ふる雪よりも　なほ　白い。

春の泡雪　あんまり　あはい
最早　二人の　別れ路。

断片詩

斷片詩　（四十篇）

×

卯の花月夜、
白色で埋められた露臺（バルコン）、
そこに在つて噴水のほとりに立つ
若い男に戀ひの笑ひを、
ふりかける色白女。

×

いや　いや、この手紙にも、
認（みと）めます、聞きます、にほひます、

そのほゝゑみ、その呟き
その黑い瞳の動き
首筋のよい薫り。

×

「月の夜の
櫻に蝶の朝寢かな」
きみが掛けてゐるうすものゝ羽根、
朝風にゆれる　おくれ毛、
戀はやはらかき花びらしとね。

×

春の晝、

蝶々は　ひら　ひらと飛んで來て、
おゝ君の忍び笑ひ、
意想外のとまり場所
春の日の心のどかさ。

×

富と名と皆棄てゝも、
戀をと、ねがふ青年、
戀よりも、富と名とに、
あこがれる年增と並び、
春日さす草野に嘆く。

×

いにしへも、今も後にも、
かはらぬは戀のたのしみ、
くるしみ、妬み。
それ故に戀のやさ手が
強く握るは歴史の八分。

×

この男を讃へよう、
幸にして女にあまく、
幸にして　社會上、自分の眞價を知らず、
幸にして　いつまでも夢を失はず、
幸にして　常にものに捉はる。

×

人々皆　いつまでも醜といひ
不道徳と賢ぶる。
われ、あからさまに美と謂ひ、
道徳といつて恐れず、
天と地との間を歩む。

×

見える限り
地上は白桃の花、
一人の影も無く、
たゞ鳥の聲がして、

天上に晝の月。

×

廣い河を、
多くの蝶が
翩々として高く渡つた。
長い堤に牛一つ見えず、
柳の樹の多いこと。

×

この服の着心地を愛しよう、
月に照る竹の葉の下、
一人寄るこの椅子の

秋のゐごゝちを愛しよう、
蕪村の句をば口にせう。

×

花すもゝの多い村、
水にたわわの影が搖れる。
瀨の岩に遊ぶ水鳥を、
驚かせる何物も無く
蒲公英の蝶も飛ばない。

×

古城を環る
李と柳、

馬を駐めて
鳥を聽く
うつくしい少年と少女。

×

ひとり高岡に登り
樹に凭れて
遠い海を見る、
その樹の枝に
うつくしい白帆の花。

×

少女子のみは

早くも見よう、
荊棘の中の一つ花、
おゝ　日本の女性よ、
私の心の花を育て咲かせよ、世界に。

×

むしやくしやする晩だ、
小蟻の群に、突然
踏込む正義の大足、
そんなものが望みだ、
彼等の騒ぎが望みだ。

×

春の初花ぢや無いが、
きれいな卯の花のやうな女だ、
それを地に墮(おと)してしまふ
あの若い男は卯の花くだし。

×

うれしい日限(にちげん)は、
きれいな異性を待つ心地
いやな日限は、
追ひ來る蛇を
ふりかへつてみる心地。

×

春雨は或時はうれしく、
ある時はいとはしい、
うつくしい活動女優を、
妻にもつた男の、
ファンから來る多くの艶書をみる心地。

×

薄情男の胸に立つ風は、
たゞ枝から花を落したばかりで滿足しない、
更にどぶ泥に投げ込んで、
でられないやうにして終ふ。

×

樹の花は枝に咲く、
戀の花は　からだ全體に咲く、
いや、そればかりぢやありません、
心が描く空にも闇にも、
咲き出る咲き出る。

×

子どもをあやす、
若い婦人の顔、
母のあとを追ふ、
更に小さい子のよちよちした足ごり
山も野も青葉。

×

女よ、私をお前に植ゑよう、
女よ、お前を私に植ゑよ、
我々の種子、
それは更に幾何の種子をつくるか、
神聖にして快い事業。

×

男らしさと、女らしさとの對立、
そこに優劣は無い
男の智と強い筋肉、
女の情とやさしい眼の色、

その間に起る見える見えない波。

×

裸で來て呉れても、
お前は持參人。
愛と健康と美と、
それから、こぶくろとの
尊むべき持參人。

×

木犀のかをる庭に、
鉋屑が風に吹かれる。
私の子に、

私の妻を讃へてる
若い大工。

×

女ばかりの乘つた舟、
なれない女手の、
みなれ棹の光り、
晝(ひる)の月、雲のやうな若葉、

×

失戀者
草に光る涙、
垂れたまゝの首、

その脊には
かまきり。

×

はこべに雨が降りかゝる、
寫眞に涙がふりかゝる、
心も空も暮れてゆく、
月も無い、あかりもない。

×

梅雨時に戀ふ　日の光り、
この怠屈に　見たいのは、
リンダ・モリアが美しい

あの華やかな笑ひ顔。

×

お祈りしてゐる白服の
つゝましやかであざやかな
沈默の少女達、
それは四月はじめに見る
白木蓮の蕾です。

×

濃みどりの青葉重なり、
庭もほの青、
前脚立てゝ石の唐獅子、

青い香を吐き
天地しづか。

×

海が誘惑する、
サイレンの聲が聞こえる
おゝ何といふうつくしい波だ、
私はこよひ平生の私で無い。

×

かゝる美の眩しさに
むねさわぎして、
おもて　そむけしは十餘年の前、

いつの間にか養はれた殘忍性よ、
今やよき　昔やよき。

×

國法の禁ずる思想、
もつてる男の痩せた頰よ
それ　物をいつてる物をいつてる。
誰もゐない野で、
今夜も月に風に。

×

あなたは　あなたの
心の入口を、

ほんに、ちらりと
見せては隠す、
それで私は戸の隙(すき)のあこがれ胡蝶。

×

私の血を煮る火、
それは誰が燃しはじめた、
自分でもあり彼女でもある。
彼女は油を注(つ)いで逃げた、
今は消すべき手段もとらない。

×

女の投げる火を避けよう、

きれいにもえる火であれど、
わたしのつけた火ではない。
わたしの方へ燃えかけて
十年なほも消えもせぬ。

×

柳の樹の下
君が妹の
つまみ兼ねた胡蝶である。
私もまたつまみかねた、
君がこゝろの胡蝶。

×

思想上の太陽はまだ出ない闇、
自分達を光に導くものを亂臣賊子と射殺し
吸血鬼に自らを笑つて投げ掛け
吸ひかたの滲酷を賞讃するのが
わが二十世紀の民。

幼兒の頬

小さい臓

一つの切株、
そこを這ふ蟻、
そこの凹みの水溜り、
光る日光、
うつる青葉。
それらをじつとみて、
興味を感じるは子ども。
恐らく、やがて
晝寢の夢にも、

この切株が入(はひ)るのであらう。
おゝ、子どもの目の愛らしさ、
小さき孺(すね)の愛らしさ。

人類愛

どこへ忘れて來たものか、
小父(をぢ)さんも小母さんも、
持つて無い、
「人類愛」を持つて無い、
それであんなに寂しさう、

坊やは忘れず、持つてゐる、
だから坊やはおもしろい、
飛んだり跳ねたりおもしろい。

少女の嘆き

こんな悲しいわたしをも、
明るく照らすお月さま。

こんなかなしいわたしにも、
かゝはりも無く唱ふ海。

お母様なら何故と、
静に問うて下さろに……。

お母様には告げられぬ
くるしみ故に夜を歩く。

あゝ、ふるさとの母上よ、
弟よ家よ、ともだちよ。

涙で前は見えません、
胸は悩みで裂けさうよ。

小兒時代に讀んだ書物

この書を今も手にすれば、
故郷の山の木の影が、
挿画の上に搖れるやう。

この書の中の物語、
きかせて呉れと愼ましく、
火ばちのわきに坐つてた、
少女のまるい顏もまた、
ページを、くれば浮び出る。

素盞嗚祀る小神社、
その祭典の夏の夜、
大堤灯のその下で、
讀んだ所をけふみれば、
蠟燭の灯が搖れゆれる。

可愛い擁護

この子可愛や、今朝(けさ)でした、
良人(やど)とわたしと、聊かの
くちいさかひをしてゐたら、
わからぬことをいひながら、
力をこめてパパさんを、
ドーアの外まで押し出して、
マ、さん擁護をやりました。
それでパパさん笑ひ出し

いさかひなんかはやめました。

お馬遊び

二人の男女が馬のさま、
前の馬には男の子、
うしろの馬には女の子、
ひらりと騎れば子どもらは、
聲をそろへて唱ひます。

「前なる馬には新なる
世界組織のリーダーが、
うしろの馬にはその夫人、

おふたり仲よし、秘密無し。」

いつまでも此處に

わたしの姉ちやま船に乘り、
遠い所へ往きました、
簞笥を、のせて往きました。

わたしの笹舟、往きました、
桃の蕾を、のせたまゝ、
遠い所へ行きました。

もし、父ちやまが言はれたら、

およめにやると、言はれたら
お母ちやまの　膝に乘り
いーや　いーやといひませう。

大正十四年九月十二日印刷
大正十四年九月十五日發行

（定價　金壹　圓）

一人の思想より
詩集

發行兼著作者　東京府豐多摩郡代々幡町代々木一四五五番地　正富由太郎

發行所　東京府豐多摩郡代々幡町代々木富ケ谷一四五五番地　新進詩人社　振替口座東京六七五七二番

發賣所　東京市神田區表神保町二番地　成蹊堂書房

印刷所　東京市芝區田町九丁目一番地　田町印刷所
印刷者　關登巳生

正富汪洋著作要目

明治三十八年	歌集	夏廟	旭堂	絶版
明治三十九年	詩歌集	小鼓	左久良書房	絶版 大震火災により
大正九年	詩集	豊麗な花	洛陽堂	絶版 大震火災により
同九年	評傳	戀のゲエテ	同	絶版 大震火災により
同十年	評傳	ゲエテとシルレル	同	絶版 大震火災により
同十年	譯詩集	バイロン シエリ 二詩人詩集	目黒分店	品切
同十年	編著	現代婦人詩歌選集	婦女界社	定價二圓五〇錢
同十年	詩集	戀愛小曲集	金星堂	定價壹圓
同十一年	詩集	汪洋新詩集	目黒分店	品切 大震火災により絶版
同十一年	評傳	天才詩人バイロン	新光社	定價二圓五十錢
同十一年	母謠童謠	樂しい家庭	資文館	定價壹圓三十錢
同十三年	詩集	月夜の海	新進詩人社	定價六十錢
同十四年	詩集	世界の民衆に	新潮社	定價壹圓
同十四年	詩集	一人の思想より	新進詩人社	定價一圓八拾錢
同十四年	實傳	詩聖ゲエテの戀愛	文英堂	未定
同十四年	評傳詩	ロウゼティ女史詩集 スウインバーンと其詩	(印刷中)	未定 近刊

292
279

終